献身

剛速球

春日信彦

天才チワワ

新体操部の混乱は、ますます激しくなっていた。新人の不平不満は、日に日に増し、ゆう子の神経はずたずたに切り裂かれていた。７月に田中新監督がやってくるまで、新体操部が存続するか危ぶまれ始めた。新入部員の間ではヒステリックな口汚い陰口が飛び交い、もはや、崩壊寸前の状態にまで追い込まれていた。嫉妬に狂った体操未経験者たちによるバレー経験者へのいじめとド素人同士の足の引っ張り合いが勃発し、部活は収拾のつかない内乱状態になっていた。

ゆう子は、女子の嫉妬がここまですごいとは想像していなかった。本来、新体操は、基礎レッスンを最低でも２年は必要としたが、新入部員たちは、基礎レッスンを受け入れようとしなかった。運動神経の成長期を過ぎてしまっていた彼女たちにとって、基礎レッスンは、あまりにも過酷なものとなっていた。新体操に最も必要とされる柔らかい身体を１５歳から身につけることは、奇跡に近いものであった。体を反って頭の上にお尻を置いたり、１８０度の開脚でのピボットなどは、彼女たちにとっては、神業でしかなかった。

つま先で立つレッスンでさえ、彼女たちは筋肉痛のあまり痙攣を起こす始末であった。練習はたびたび中断し、副部長の宮沢の指示にも反抗的な態度をとるようになっていた。部活を休む部員も出始め、各部員の実力差が顕著になっていた。疲労困憊してしまったゆう子と宮沢であったが、新監督がやってくるまでは、部活をやりきるよう励ましあった。やつれ始めたゆう子を心配した宮沢は、最近では、ゆう子の家でだべって帰るようになっていた。

６月に入っては、新入部員の健康を考え、部活を早めに切り上げていた。宮沢は、倒れそうなゆう子を支えながら帰宅する日々が続き、母親、陽子も心配する毎日が続いていた。倒れるように家にたどり着くと母親とチワワのファイトは、飛んで玄関にやって来た。「ゆう子、大丈夫。いつもありがとう。さあ、上がって」母親は、二人をテーブルに着かせ、フレッジからオレンジジュースを取り出した。「ゆう子、このままだと、病気になるわよ。部長なんか辞めなさい」いつもの口癖をはいた。

　ゆう子は、天を仰ぎ、グラスのジュースを一口グイッと喉に流し込み、崩れ落ちそうな声で返事した。「ママ、そんな無責任なことはできないよ。とにかく、新監督がやってくるまでは、宮沢と二人で戦うしかないの」宮沢もゆう子の横顔をちらっと見て、ジュースを一口飲んだ。「お母さん、心配なさらないでください。二人でこの危機を乗り切って見せます」宮沢は、大きく深呼吸し、ゆう子の右肩に手をそっと置いた。「ご馳走様でした」宮沢は、すばやく席を立ち、玄関に向かった。

　「いつもありがとう。気をつけてね」母親とファイトは、玄関の外で宮沢を見送った。今にも倒れそうなゆう子は、地獄から地上に這い上がるように、二回への階段を壁伝いに上っていった。一足先に駆け上がったファイトは、首を傾げて心配そうに、ゆう子がたどり着くのをお座りしてじっと待っていた。部屋にたどり着いたゆう子は、机の横にカバンを放り投げ、即座にバスに向かった。バスから上がり、すぐに夕食を終えると、月曜日提出の英語の宿題を一気に終え、崩れ落ちるようにベッドに倒れこんだ。

明日の日曜日は、横山と八神の二人と姫島に行くことになっていた。翌朝、三人は、自転車で１０時半に家を出立し、１１時５０分の連絡船「ひめしま」で岐志漁港を出発することにしていた。最近は、気疲れのためか、すぐに眠られず、勇樹と剛士の笑顔が、頭の中を駆け巡っていた。６月に入り、めっきりやつれ始めたゆう子をレンズで捕らえるたびに、剛士は心配になり、時々、近づくチャンスを見つけては、ゆう子に声をかけていた。ゆう子は、心から心配している剛士に少し笑顔を見せるようになっていた。

遊んで欲しそうな甘えるファイトを横目に、今夜は、しっかりと目を閉じた。ファイトは、ゆう子のために命がけで尽くす献身的な心を持っていた。人間の心を持っているのではないかと疑うほど、ゆう子の気持を即座に感じ取っていた。ゆう子がブルーになって、考え事をしていると感じ取ったときなどは、そっと、身を引いて、少しはなれたところで心配そうに見つめていた。宿題に没頭していると感じ取ったときは、静かにゆう子の後ろでじっと寝ていた。

ファイトは、盲導犬のように賢かった。家族は、とても不思議がっていた。特別な訓練をしたわけでないのに、人間の言葉を理解できたかのように反応した。お手、お代わり、チンチン、シット、ステイ、ゴー、ジャンプなどは、一回で習得した。二足歩行も朝飯前のように習得した。音楽を鳴らすと、立ってぐるぐる回ったりもした。少し奇妙なのは、笑顔を作ることだった。家族が笑っていると、ファイトも眉毛を上下させて笑うのだった。

父親の宗一郎は、あまりにも賢いので、笑うチワワと言うことで、コマーシャルに出して、金儲けしようとまで言い出していた。単なる動作の習得は言うまでもなく、ほえる回数までも記憶する能力を持っていた。イチたすイチは、ワン・ワンと教えると、即座に記憶して、同じことを繰り返すことができた。特に家族が感心した出来事は、家族それぞれのスリッパの見分けができたことだった。

壁のところに、ゆう子、詩織、陽子、宗一郎のスリッパを置き、ファイトに名前を言って、持ってくるように指示するとちゃんと間違えずに言われたスリッパをくわえて持ってきた。このことは、特に教えていなかったために、家族みんな、跳びあがって驚いた。サーカスなどには、天才と思わせる犬が結構いるが、ファイトは、彼ら以上に賢いように思われた。子犬のときから可愛がっていたためか、特に、ゆう子に対する忠誠心は、犬とは思えないほどだった。

ファイトのシャンプーは、ゆう子が入浴のとき、バスで行っていたが、ファイトはオスのためか、そのときオスの本性を現していた。ファイトをシャンプーし終えると、ゆう子へのお礼のつもりなのか、単なるスケベなのかよく分からないが、ゆう子の身体を舐めまわした。特に、ゆう子が股を開くと、一目散に股間に飛び込んで、割れ目をペロペロと必死になって舐めまわした。ゆう子は、そういう献身的なファイトが大好きだった。

あまりにもやつれはててきたゆう子を見かねて、毎朝、ファイトは優しい愛撫をするようになった。ゆう子を６時には起こすため、５時半には目を覚まし、ゆう子に心地よい寝起きをさせるために、こっそり布団にもぐりこみ、割れ目の甘い蜜つぼを舐めるようになった。舐められている間、ゆう子は心地よく空を飛んでいる夢を見た。舐め終わると、ぺろぺろと唇を舐めて、ゆう子を目覚めさせた。

姫島探索

翌朝、八神と横山は１０時少し前にゆう子の家にやって来た。姫島には、飲食店がないと言うことで、八神が自分の店のカルビを使って、三人分の焼肉弁当を持参してきた。お茶は、姫島にある唯一の店「シーガルショップ」で買うことにしていた。岐志漁港までのルートは、地理に詳しい八神に任せることにした。筑前前原駅を通過し、そこから北上し、５４号をひたすら走ることにした。１０時半に出立すれば、ゆっくり走っても１１時２０分には岐志漁港に到着できると計画した。

電動自転車に乗った３人は、八神を先頭に元気よく出立した。小富士と松原で休憩し、のんびり走ったにもかかわらず、１１時１５分に岐志漁港に到着した。そこには、小さな観光休憩所があり、そこで連絡船「ひめしま」の出航まで姫島での活動の打ち合わせをやった。今回の姫島探検の目的は、鳥羽についての聞き込み調査であるため、八神は、到着後即座に聞き込み調査をすることになった。ゆう子と横山は、姫島を探索することにした。

１１時５０分になると、小さな連絡船「ひめしま」は出航し、１６分間の船旅に入った。その日の波は穏やかで、「ひめしま」は小さな上下動をしながら、白波を切り裂き、威勢のいいエンジン音を発して、真っ青な海を突っ走っていった。乗船してまもなく、添乗員から９４０円の往復乗船券を三人は購入した。小さなゆれを感じながら、糸島マップを見ながらおしゃべりをしていると、あっという間に姫島港に到着していた。

姫島は、周囲3.8キロの小さな島であったが、民家は渡船場から西のほうに密集していた。三人は、公園でほんの少し休憩し、島を時計回りに歩き出した。しばらく歩くと数匹の猫が挨拶にやって来た。３人は１３時３０分にシーガルショップで合流することになり、八神は、民家に入り聞き込みを開始した。ゆう子と横山は、野村望東尼（のむらぼうとうに）のお堂に行くことにした。二人は、民家が立ち並ぶ細い通路をキョロキョロと歩き、お堂への案内看板にしたがって進んで行くと、小さな丘の上のお堂にたどり着いた。

野村望東尼のことを知っている歴女たちは、彼女目当てに姫島観光にやってくるが、なぜか、彼女はそれほど知られていない。ゆう子もまったく知らなかった。横山は、彼女のことについて詳しく、ちょっと彼女のことを説明した。「野村望東尼は、勤王志士たちを庇護したために、姫島に流されちゃったのよ。別に悪いことをしたとは思わないんだけどね。権力って怖いね。その後、高杉晋作らに救出されたからよかったけど」歴史が嫌いなゆう子は、適当に頷いて、お堂の中を覗いていた。

「野村さんって、この中で暮らしていたのかしら？」小屋のようなひっそりとした中に飾られていた野村望東尼の肖像画をじっと見つめ、横山に尋ねた。「ホント、惨いじゃない。ここは牢獄なのよ。こんなところに閉じ込めて」横山の憤りを感じ取ったとき、ゆう子も権力の怖さに震えが来た。「悪いことをするような女性には見えないものね」野村望東尼の石像に目をやり、ゆう子は胸の前で両手を合わせた。

「近くに、学校があるはずね」姫島小学校を探しに横山は歩き出した。ゆう子も急いで後を追った。しばらく歩くと木造の学校にたどり着いた。「素敵じゃない。木造の学校って、初めて」ゆう子は、学校が目に入ると校門のところまでかけていった。玄関のところには、姫島小学校・志摩中学姫島分校と書かれた大きな表札が掛けられていた。「鳥羽君、ここに通っていたのね」想像していた以上に立派な校舎に二人は驚いた。

学校の裏を覗いたが、そこから先には、民家はなかった。「ホント、ちっちゃな島ね。でも、きっと、すばらしい先生たちがいるんだわ。鳥羽君みたいな天才が育ったんだもの」ゆう子は、姫島の不思議な力を感じていた。二人は、海岸沿いの細い道を歩いて待ち合わせ場所のシーガルショップに行くことにした。潮の香りを胸いっぱいに吸い込み、心地よい波の音を聞きながら、波打ち際を眺めていると、またもや、猫の集団が現れた。

「猫よ、十匹以上、いるんじゃない」ゆう子は、大声で叫んだ。島の猫は、水揚げされた魚をもらって、のんびりと暮らしているに違いなかった。姫島行きを八神に誘われたとき、部活のことで頭がいっぱいで、最初は気がすすまなかった。でも、今こうやって、姫島の雄大な自然に触れて、もやもやした悩みを洗い流してくれた姫島旅行に心から感謝した。「鳥羽君って、こんなにすばらしい島で大きくなったのね」ゆう子にとって、鳥羽の過去はどうでもいいことであった。

　二人がシーガルショップに到着し、店の中を覗いたが、八神はまだ到着していなかった。二人はお腹がすいて早く昼食を取りたかったが、二人だけ先に食べるわけにも行かず、

八神が到着するのを待つことにした。「遅いな～、お腹すいたよ」ゆう子は、お腹を押さえて愚痴をこぼした。店員に待ち合わせていることを伝えると、隣の部屋で待つことを許された。そこには、テーブルと椅子があり、お茶を飲みながら待つことにした。

　八神は、２時近くに到着した。「よ～、悪い。それが、三件目で、いい情報が取れたのよ。すぐそこの民宿のおばさんは、物知りでね。島のことをいろいろと話してくれたってわけ。帰ったら話してあげるから、楽しみにしてな。そう、弁当。はらすいた。食べよ」八神は、自分の弁当を取り出し、二人に促した。「待ってたんだよ。ホント、お腹ペコペコなんだから」ゆう子も弁当を取り出しテーブルの上に置いた。

１７時１０分出航の「ひめしま」で帰る事にしていた三人は、残り２時間ほどをどのように費やすか話し合った。八神が、鳥羽が通っていた学校を見たいというので、海岸沿いの道を時計回りに歩いて学校を見に行くことにした。シーガルショップの店員にお礼を言うと、猫がたむろしていた方向に歩き始めた。しばらく歩いていると、海岸に立っている３人の男性の姿が眼に入った。

彼らに１０メーターほどまでに近づくと、ゆう子が叫んだ。「あ、中村先生。水際にいるのは鳥羽と安田じゃないかしら」八神も叫んだ。「あんなところで、何やってんだろう？ゆう子、声をかけてみたら？」ゆう子は、一瞬躊躇したが、声をかけてみることにした。「センセ～、こんにちは。姫島観光ですか？」中村先生は、大きく手を振り、答えた。「そうだ。君たちも、観光かい。いまからどこに行くんだい？」ゆう子も大きな声で答えた。「は～～い。今から、小学校を見に行きます」中村先生は、鳥羽と安田に声をかけると、ゆう子と同じクラスの安田が大きな声を張り上げた。「よ～、ゆう子じゃないか。奇遇だな～」

上半身裸でハーフパンツだけの鳥羽を見たゆう子は、鳥羽に尋ねた。「鳥羽君、裸で何やってるの？今から泳ぐの？」鳥羽が、返事に困っていると安田が答えた。「いや～、写真を撮っていたところさ。鳥羽の芸術的肉体美を撮っていたところだよ。ゆう子もしびれるだろ～」安田は、鳥羽の裸体を海や山をバックに撮っていた。八神は、鳥羽が写真部と聞いていたので、ゆう子に尋ねた。「あの二人写真部なの？」ゆう子は、小さく頷いた。

安田は鳥羽と中村先生を少し後において、ゆう子たちが立っている小道につながる小さな階段を駆け上がって行った。「よ～、ゆう子。奇遇だな～。お二人は、ゆう子さんのお友達ですね。俺は、ゆう子と同じクラスの安田です。よろしく。今、鳥羽の写真を撮っていたところで、もうそろそろ引き上げようと思っていたところでね。よければ、ご一緒させてくれない。今から、どちらへ」図々しい安田は、可愛い八神が気に入ったらしく、速攻を掛けた。

安田が、一人でナンパしているところへ無表情の鳥羽と笑顔の中村先生が現れた。ゆう子は、空気が読めない安田が嫌いだったが、旅は道ずれと言うことで、しぶしぶ承諾した。「今から、姫島小学校を見に行きます。先生もどうですか？」安田は、両手を叩いて笑顔で返事した。「そうこなくっちゃ。そうだ、学校で記念撮影をしよう。俺たち、チョ～ついてるな、鳥羽。こんなところで美女たちと出会うとは」鳥羽は、調子のいい安田に合わせて、彼女たちをよいしょした。「まったくラッキーです。皆さんの手荷物、お持ちいたしましょうか？」ゆう子は、鳥羽の一面を垣間見た。鳥羽が、こんなにもお調子ものだとは、夢にも思っていなかった。

ゆう子は、少しムカついたが、笑顔で返事した。「手荷物は、いいわ。さあ、いきましょう」ゆう子は、八神と横山に目配せし、安田をにらみつけて歩き始めた。後を追いかけた安田は、声をかけた。「ゆう子、そう、急ぐなよ。仲良く、話でもして楽しくやろうじゃないか」鳥羽は、ゆう子が怒っているのではないかと気が気でなく、彼女たちの後に黙ってついて行った。木造の小学校で記念撮影を終え、一緒の船で帰る事になった彼らは、いろんなところをバックに彼女たちの写真を撮り、現像した写真をプレゼントする約束をした。

時刻通り出航した「ひめしま」は、岐志港に向かって１６分の静かな走りを続けた。彼らは、お互いをよく知らずわいわい騒いでいたが、中村先生が自己紹介の提案をした。「みんな、簡単に自己紹介をしてはどうだろう。私は、イトコウ、２年９組担任の中村です。野球部の監督をしています。次は、安田」安田はにやけた顔で自己紹介を始めた。「俺は、ゆう子と同じ、２年９組です。写真部です」鳥羽は、安田の顔を見ると緊張した顔で自己紹介を始めた。

「僕は、１年６組です。安田先輩と同じく写真部です」鳥羽が、ゆう子の顔を見るとゆう子が自己紹介を始めた。「私は、安田君と同じクラスです。新体操部の部長をしています」隣の八神が、笑顔で自己紹介を始めた。「私は、イトコウ定時制の２年です。八神焼肉飯店の看板娘です。よろしく」横山がクスクスと笑うと、自己紹介を始めた。「私は、Ｋ高校の２年です。ボーリング部に所属しています」それぞれ自己紹介が終わると、ゆう子が先生に尋ねた。

「先生は、時々、姫島にいらっしゃるのですか？」中村先生は、頭をかきながら気まずそうに話し始めた。「まあ～、確かに時々は、姫島に行きます。生まれは姫島で、小学校の２年のとき、イト小学校に転校しました。だから、姫島は古里なんです。でも、今回は、ちょっと、鳥羽君にお願いがあって、二人についてきたんです」中村先生は、少し肩を落とし、寂しそうであった。

ゆう子は、先生が鳥羽にお願いすることってどんなことか見当はついていたが、念のため聞いてみることにした。「お願いって、どんなことですか？」中村先生は、しばらく黙っていたが、鳥羽が気を利かせて話し始めた。「いや、野球部へ入らないかって事なんだ。きっぱりと断ったけど」鳥羽の口調は、強い意思を表していた。「そうなの、それがいいわ。野球部なんかに、入るものじゃないわ」ゆう子は、鳥羽の意思を後押しした。

　意外なゆう子の言葉を聞いた鳥羽は、目を大きくした。中村先生も、ゆう子の言葉にショックを受けたみたいで、首をうなだれてしまった。安田は、中村先生を気遣って、鳥羽に助言した。「鳥羽、お前は天才だ。写真も野球もやっても、医学部に合格できる。この際、写真部と野球部を掛け持ちしては？」中村監督は、うなだれていた頭をひょいと持ち上げ、話し始めた。「鳥羽、掛け持ちでもいいぞ。どうだ。ピッチャーをやってくれないか？」

　ゆう子は、即座に口をはさんだ。「ダメよ、ピッチャーなんて。鳥羽君、絶対、やっちゃ、ダメよ」鳥羽は、まったく野球部に入る気はなかったが、ゆう子が、なぜそんなにも反対するのか不思議に思った。「先生、ゆう子さんが言われるように、何度言われても、野球部に入る気はありません。僕は、ゆう子先輩の写真を撮ることが生きがいなんです。もう、この辺で勘弁してください」鳥羽は、泣きそうな顔で中村監督に頭を下げた。中村監督は、自分の言ったことが恥ずかしくなり、鳥羽に言葉を返した。「いや、先生が悪かった。もう二度と勧誘はしない。すまなかったな」中村先生は、鳥羽に頭を下げた。

投手への第一歩

安田と鳥羽は、八神焼肉飯店に食事に行ったついでに姫島で取った写真を手渡すことにした。横山への写真は、ゆう子に依頼した。さっそく二人は、前原にある八神焼肉飯店本店に自転車で向かった。黒いドアを押し開けると女子学生バイトらしきウェイトレスが跳んでやって来た。案内された個室の堀炬燵式のテーブルに腰掛け、メニューを開き呼びブザーを押した。日曜日は、サービスランチはなかったが、八神に気に入られるために、奮発して焼肉Ａ定食（ロースとカルビ）を注文することにした。注文をとりにやって来た可愛いウェイトレスに定食を注文すると、八神を呼んでもらうように頼んだ。

しばらくすると、八神が肉を運んできた。「あら、いらっしゃい。最高の伊万里牛だから、とってもおいしいですよ。ゆっくりしていってくださいね」安田は、すかさず、ショルダーバッグから写真を取り出し、八神に見せた。「これ、姫島での写真。どうぞ」安田は、笑顔で差し出した。「え、ホント、うれし～、ありがとう」八神は、写真を受け取り、姫島神社で撮影された記念写真に目をやった。「ありがと。お礼に、ソフトクリームサービスするわね」八神は、コンロに着火すると、ご飯類を運ぶために席を立った。

鳥羽は、安田のにやけた顔を見つめ声をかけた。「先輩、点数、稼ぎましたね。マジ喜んでいたみたいでしたよ」安田は、ウキウキして、八神が戻ってくるのを心待ちにしていた。おはちを運んできた八神は、配膳を終えて、鳥羽の右隣に腰掛けた。「お母さんが、お友達と一緒に食事してきなさいって」安田は、ヤッターと心で叫んだが、平然とした顔で、話し始めた。「さすが、お母様でいらっしゃる。楽しい昼食ができますね。幸運だな～」あまりにもかしこまった話し方に、八神は噴出しそうだった。

安田が、ロースを焼きながら、八神になれなれしく話しかけた。「八神さん、趣味は何ですか？」八神は、不意の質問に一瞬戸惑ったが、実現しそうもない夢を語った。「趣味と言うか、夢と言うか、シンガーソングライターとして、デビューしたいんです。いま、歌のレッスンに通っているんだけど、いまひとつ、パッとしないのよね」ブルーなトーンでつぶやいた。「ワオ、歌手ですか。すごいな～、一度聞かせてください」安田は、一人で舞い上がってしまった。

レアに焼けたロースを八神と鳥羽のタレが入った器に置き、カルビを焼き始めた。鳥羽が、一口ロースをかじり、八神に遠慮がちに尋ねた。「八神さん、ちょっとお尋ねなんですが、ゆう子さんは、かなり、野球が嫌いみたいですが、いったい、どうしてなんですか？あの時、野球部に入部しちゃダメって、真剣な顔で、しきりに言ってましたよね。びっくりしました」鳥羽は、八神の横顔をそっと見た。

ロースを放り込み、口をモグモグさせていた八神は、一瞬口が止まった。ゴクンと肉を喉に落とし込み、お冷を一口飲んだ八神は、一呼吸置いて話し始めた。「そうね、前はあんなんじゃ、なかったんだけどね。すっかり変わっちゃったのよね、あのときから」八神は、菊池がなくなったことは、あまり話したくなかった。真剣に耳を傾けていた鳥羽は、質問した。「あの時って？」安田も真剣な顔つきで聞き入っていた。

八神は、しばらく黙っていた。確かに菊池が死んでから、ゆう子の様子が一変した。でも、ダチでもゆう子の心には入り込めなかった。どんなに心配しても、ゆう子の心の闇を知ることはできなかった。深い傷に苦しんでいることは、はっきり分かっていても、どうやってゆう子の心を救ってやればいいか、まったく見当がつかなかった。なぜか、この二人に話せば、何かいい方法が浮かぶような直感が働いた。

「二人とも、ここだけの話だからね。私が話したなんて、誰にも言っちゃダメよ。う～、そう、ゆう子が変になったのは、彼氏が、死んでからなの。彼氏って言うのが、野球をやっていて、ピッチャーだったのよ。だから、ピッチャーと聞くと、ますます、野球を毛嫌いしたと思う。あの時、鳥羽君に、ムキになってダメって言ったでしょう。そういうわけなのよ」八神は、肩を落として、お冷を一口飲んだ。

「あ、焼きすぎ」八神が叫ぶと、話に聞き入っていた安田は、少し焦げてしまったカルビを急いで取り上げた。少し焦げたカルビは、安田の小皿に載せ、苦笑いしながら、新しくカルビを網の上にそっと載せた。「いや～、話が、深刻だものだから、聞きいっちぃまって」鳥羽は、その亡くなった彼氏についてもう少し話を聞きたかった。「彼氏は、交通事故かなんかで？」

八神は、話を簡単に切り上げたかったが、いったん話し始めると、すべてを話さないと気持ちがすっきりしなくなってしまった。「彼氏って言うのは、菊池って言って、糸島中学から、甲子園で名門のＹ高校に進学したの。でも、入学して１年もしないうちに肩の骨肉腫におかされて、Ｑ大病院に入院したの。本人は、すぐに退院できるとイキがっていたけど、あっという間に、天国に行ってしまったのよ。

そのころ、ゆう子は、東京の新体操の名門W高校にいたの。看病しようと、必死になって転校の手続きをして、やっと、転校できることになったんだけど、不運にも、帰省する日に、菊池は他界したの。神様って、いるのかしら。こんな惨いことをするなんて」八神の声は、涙声になっていた。八神が、うつむくと、安田が声をかけた。「鳥羽が、余計なことを聞いちまって」安田は、鳥羽に目配せをした。

慌てた鳥羽は、即座に声をかけた。「すみません、余計なことを聞いて」鳥羽もあまりにも悲しい事情に何と言っていいか戸惑ってしまった。顔を持ち上げた涙目の八神は、笑顔を作り、返事した。「いいのよ。話をして、少し気分が楽になったみたい。でも、ゆう子は、依然、地獄に落ちてもがき苦しんでいるみたい。どうしてあげたらいいのか」八神は、ミディアムに焼けたカルビをゴマダレにつけて口に放り込んだ。

暗い空気を感じた安田は、何か明るい話題はないかと、知恵を絞ったが、いい話題が思い浮かばなかった。八神は、味噌汁を一口すすり、つぶやいた。「野球部が、あんなだから、いけなのよ。菊池がいたら、きっと県大会にいけたのに。エースが、いないからダメなのよね」八神は、おはちに目をやった。気を利かせた鳥羽は、ご飯をよそい、さっと八神に手渡した。鳥羽は、そっと話しかけた。

「県大会に出場したら、ゆう子さん、元気が出ますか？」八神は、口をモグモグさせて頷いた。お茶をすすり、口の中のご飯を流し込むと、甲高い声を上げた。「そりゃ～、そうだけど、そう簡単に県大会なんか行けるもんじゃないんだから。今の実力じゃ、地区大会、初戦突破できるかどうか。まあ、無理って感じ、あんな、へぼピッチャーじゃ」流れがますますゆう子の話になり、慌てた安田が話を変えようと口を挟んだ。

「お父さん、ベンツに乗っていらっしゃるんですね。僕も、金持ちになって、ベンツに乗りたいな～」鳥羽も話をつなげた。「八神焼肉飯店は、天神にもあるんですか？」八神は、突然の質問に気分が切り替わった。「支店は、二丈と志摩にあるんだけど、おやじったら、来年は、博多シティーにも支店を出すつもりなの。そんなに、もうけてどうするつもりよ。そう、ソフトクリーム」八神は、すっと立ち上がり、襖を開けて出て行った。

安田は、鳥羽に小さな声で話しかけた。「八神の店、儲かってんだろうな～。八神が、後を継ぐんだろうか？」鳥羽は、首をかしげて答えた。「兄か弟がいるんじゃないですか。さっき言ってたように、彼女は、歌手志望じゃないですか」安田は、小さく頷き、独り言のように話し始めた。「彼女と結婚できたら、いいよな～、可愛いし、金持ちだし」鳥羽は、あきれた顔で安田を見つめた。

「入るわよ」と明るい声がすると、ソフトクリームをトレイに載せた八神の笑顔が、開いた襖からパッと現れた。「食べて」八神は、安田と鳥羽に手渡した。「うまそう～。いただきま～す」安田は、ソフトクリームの先端に口をつけた。鳥羽は、舌先でぺろりと舐めた。八神は、先端をチュッとすすった。「うまい、最高にうまい」安田は、八神を見つめて大きな声で言った。鳥羽は、先程話していた兄弟のことを聞くことにした。

「八神さん、ご兄弟はいらっしゃるんですか？」八神は、小さな笑顔を作り、答えた。「中学１年の弟がいるの。サッカー好きの。将来は、Ｊリーガーの選手になって、ワールドカップに出るなんていってるのよ。ホント、可愛いんだから」弟の話をしているときの八神は、とても楽しそうだった。「すごいじゃないですか。Ｊリーガーですか。ワールドカップに出れるといいですね」鳥羽は、お兄さんはいないか尋ねた。

「お兄さんは、いらっしゃるんですか？」八神は、顔を振った。安田は、突然笑顔を作り、尋ねた。「それじゃ、八神さんが、あとを継がれるんですか？」大きく目を開き、とんでもないという顔で答えた。「後は継がないわよ。私は、必ず歌手になって見せるわ」ドヤ顔になった八神は、大きく頷いた。余計なことと思いながらも、安田は尋ねた。「それじゃ、跡継ぎは？」八神のドヤ顔を見つめた。

「弟じゃない。Ｊリーガーなんて、なれっこないんだから。いずれ挫折して、店を継ぐわよ。現実ってものが分かれば、店を継ぐでしょ」マジになった八神は、諭すように答えた。頷いた二人は、八神のシビヤな考えに気後れしてしまった。安田は、さらに余計なことを話し始めた。「でも、夢がかなって、Ｊリーガーになるかも。そのときは、八神さんが・・」八神は、ちょっと困った顔をした。確かに、そのことは、時々考えていた。

「夢がかなって、店を継ぎたくないってことになれば、歌手をやりながら、店をやるわよ」しめたと思った安田は、できる限りの笑顔を作った。「Ｊリーガーの夢も、歌手の夢もかなうといいですね。それに、県大会の夢もかなうといいですね」安田は、とんでもない余計なことを言ってしまった。八神は、笑顔を作ったとたん、緊張した顔を作った。「そうよ、エースは、いないの？」八神は、鳥羽の顔をじろっと見つめた。

その顔はまさか、とびくついた鳥羽は、グイッと身を引き、そして、ゆっくりソフトクリームのコーンをかじった。「鳥羽君、天才でしょ。人肌脱ぐ気はない？ピッチャーをやりながら、写真を撮るってのもいいじゃない」鳥羽から安田にゆっくり八神の顔が移動した。安田は、無意識に頷いてしまった。ここで点数を稼げば、ライバルたちから一歩抜き出るような気がした。「そう、鳥羽、どうだ、やってみては。お前なら、エースになれるんじゃないか」鳥羽の顔が、一瞬引きつった。

「いや、ダメです。ゆう子先輩も、絶対にダメって言ってたじゃないですか」鳥羽は、激しく顔を振った。八神が、ポンと鳥羽の右肩を叩いた。「鳥羽君、ピッチャーやってよ。もし、県大会に出場できたら、ゆう子は、きっと喜ぶわよ。ゆう子も立ち直れると思うの。この通り、お願い」八神は、顔の前で両手を合わせてお願いした。ゆう子が喜ぶと聞いて、鳥羽の心は、少し動いた。「本当に、ゆう子さんは、喜びますか？」鳥羽は、念を押した。

八神は頷き答えた。「親友の私が言うんだから、信じて。県大会まで行けば、きっと、ゆう子は、立ち直れる。信じて」鳥羽の顔は、真っ赤になっていた。しばらく考えた鳥羽は、ゆっくりと返事した。「ゆう子先輩が喜ぶんであれば、やります。ピッチャーをやります」飛び上がった八神は、大声で叫び、両腕でガッツポーズをとった。「やったー、よし、頼むわよ、鳥羽君」安田も、飛び上がり、八神のところに駆け寄っていった。「よかった。鳥羽、頼むぞ」と言って、八神と握手した。八神のやわらかい手のひらの感触に、安田は天にも登る快感で気絶するところだった。

鳥羽は、安田のみえみえの魂胆にあきれ果ててしまった。安田と八神は、能天気に万歳を始めた。「ちょっと、落ち着いてください。隣の部屋の方がびっくりしますよ。まあ、やるにはやりますが、僕は、野球をまったくやったことがないんです。エースになれるか分かりませんよ」八神と安田は、顔を見合わせて、唖然とした。八神の沈んだ声がした。「嘘でしょ。中村先生は、ピッチャーになってくれって、お願いしてたじゃない」鳥羽は、事情を話すことにした。

「僕は、姫島育ちで、野球をやったことがないんです。野球をやるメンバーがいなかったし。でも、なぜか、剛速球が投げられるんです。僕にも分かりません。とにかく、やってみます。ゆう子先輩のために」八神は、目じりを下げて頷いた。「鳥羽君は、天才なんだから、やれるわよ。県大会に行ってね。ゆう子のために」今、ゆう子を救えるのは、鳥羽しかいなかった。

翌日、鳥羽は、野球グランドに向かった。三塁側から写真を撮り始め、中村監督のそばまで歩いていった。バッターボックスに立ったモンスターにフォーカスし、シャッターを数回切った。イケメンモンスター目当てにやって来たＪＫの黄色い声が飛び交うなか、監督に歩み寄っていった。「よう、鳥羽のおかげで、野球部の人気が上がったよ。今では、モンスターは、スター気取りだ」勧誘をあきらめた中村監督は、時々、写真を撮りにやってくる鳥羽を快く受け入れていた。

鳥羽は、何気なく話しかけた。「モンスター、調子よさそうですね」監督は、頷き、笑顔を作った。モンスターの横にいた衣笠コーチが戻ってくると、いつものいやみを言い始めた。「ＪＫの写真なんか撮るより、野球のほうが楽しんだがな～。ちょっと投げてみないか」コーチは、鳥羽をからかった。いつもならば、無視して立ち去っていたが、マジな顔で返事した。「はい、投げてみます」中村監督と衣笠コーチは、顔を見合わせた。

「今何と言った。投げてみる、と言ったよな。ホントだな」コーチは、鳥羽に飛びつき、抱きしめた。「投げてみろ。入部するんだな」監督は、念を押した。鳥羽は、頷き、返事した。「野球の経験は、まったくありません。それでもいいですか」鳥羽は、監督の返事を待った。「いいとも、やってくれるか。おーい、みんな、集まってくれ」監督は、マウンドにいる選手に声をかけた。